

クルーズご意見番「松浦睦夫」が語る

ゆたか倶楽部 よもやま話

vol. 2

歴代の客船をゆたか倶楽部の歴史とともに振り返る新コラムです。語り部は、初代クルーズマスターのゆたか倶楽部創設者、松浦睦夫です。

昨今のクルーズは船会社が寄港地を選定し、クルーズ商品として旅行会社が販売するものが一般的です。いまから30年前はチャータークルーズが主体でした。チャーター料金は船のサイズや時期によって大きく異なるもので、1990年(平成2年)に「ユーゆうとびあ」天津・北京・大連クルーズ10日間の時はチャーター代が1日約600万円でした。今はご存知の方は少ないと思いますが、ユーゆうとびあの名は「だいやもんど・おきなわ」(1万2344トン)です。1975年(昭和50年)に開催された沖縄海洋博への海の足として、東京―那覇航路に就航し、1982年(昭和57年)に西日本商船に売却され、改装を施した後チャーター船として再就航しました。この船の特徴は「速い」ことです。例えばグアム・サイパンへは現在の船でも5日かかるころを、4日で行けるほど。

速い分だけ燃費は食います。しかし、日数を短縮できるので、チャーター代を往復で1日〜2日分少なくできる、魅力的な船でした。

当時のチャーター船は裸備船(はだかようせん)と呼ばれ、チャーター代に含まれるものは、食事と客室代の基本的なものだけでした。運航会社の西日本汽船(現在の日本クルーズ客船)と料理やイベント、ベッドメイク、ランドリーに使う洗濯機の洗剤に至るまで何回も打ち合わせして決めていきます。進行役であるMC(マスターオブセレモニー)も含めて船内イベントを行う裏方スタッフはいないので、すべてこちらで手配しなければなりません。あらゆるツテを使い、俳句や書道、体操などカルチャー系の先生に乗船依頼し、船内で教室を開いていただきました。

音楽家の高木東六氏には毎週横浜の人形の家で歌の指導をしているメンバー20人(シワクチャーズ)も一緒に乗船してくださいました。船内での唱歌教室はとても人気でした。東宝の二枚目スター池部良氏には、講演をしていただきました。

した。脚本家志望だったのに、男前だったので俳優にさせられた方で、その頃は俳優から作家に転身し、毎日新聞の日曜版に「そよ風ときにはつむじ風」(のちに日本文芸大賞受賞)を掲載中でした。台詞を覚えないうことで有名だった三木のり平さん以上に物覚えが悪くて大変だった話などで盛り上がりました。講演後1泊して下船し、日本へ飛行機で戻る予定でしたが、奥様のお化粧に時間がかかり、予定した飛行機に乗れなかったそうです。東野船長にはカルチャー教室でハンモック作りを教えてくださいました。甲板で一本の棒を切断し、ドリルで穴を開けて紐を編んでいくもので、3本も作ってお土産にされた方もいました。

「ユーゆうとびあ」天津・北京・大連クルーズ10日間「チャータークルーズは天津で一旦下船し、バスで北京へ移動し、万里の長城・故宮博物館を観光してから再び天津に戻るというランドツアー付き。ランドツアーの4日間は、移動に使う貸切りバスの乗客メンバーをずっと同じにすることで、皆さんだんだん親しくなってきました。実はこのメンバー決めが大変で、参加者330人を年齢や住まいの地域など共通点を見つけて組んでいます。

バス移動途中で添乗員が突然「クルーズ最後の夜にバス号車対抗歌合戦を行

います」と発表。ここから面白い! おしゃべりや寝ていたバスの中が、出し物の企画会議になるんです。最初は乗り気じゃなかった人たちも、船に戻り、船のあちこちで練習する他チームの姿を見ていくうちに、だんだんと熱くなっていく。夕食後も自主的に集まり、歌や寸劇の稽古や衣装の準備に夢中。限られた予算とスタッフの中で、「お客様を退屈させないためにはどうしたらいいのか」を真剣に考えた結果、生まれたバス号車対抗歌合戦は、お客様の協力もあつて大成功でした。歌合戦にはキャプテンやお客様代表に審査員になっていた、各賞の賞品は、ランドツアー途中で購入しておいた現地ならではのお菓子や小物などをお渡ししました。終了後、次の歌合戦の練習計画を立て始めるグループもいたようです。

裸備船「チャータークルーズの「何もない」をうまく逆手にとれたと、私自身もうれしい思い出でいっぱいです。

日本のクルーズ略史(日本客船「が続々デビュー」)

1990年

「にっぽん丸」(2万1903トン)就航
「クリスタル・ハイモニー」(後の飛鳥II・4万9400トン※当時)就航

「おりえんとびいなす」(2万1884トン)就航

「ソング・オブ・フラワー」(8282トン)再就航

ゆたか倶楽部、「ユーゆうとびあ」をチャーターし、天津・大連クルーズを実施